ン」自身の記錄が雄辯に物語つてゐる(頁一三五―一三六)樣に、悲慘な迫害の歷史と云つてよく、第五、特に第六章に致つて始めて社會のあらゆる分野に滲透せる猶太人勢力の活躍が書かれてゐるのであつて、第六章の革命と猶太人。ナチの擡頭等の項目は動きつゝある現在に直接するが故に特別に興味深く讀まれたのである。結局「盟邦獨逸は何が故に猶太人を排斥するのか」の問ひに對し、微に入り細を穿つた精緻極まる研究で以て此の歷史的宿命を分析し解明してゐられるのである。一朝一夕にならなかつた、なみ〳〵ならぬ著者の努力に對して敬意を表し度い。

就中本書の特色とも云ふべきは單に猶太人の迫害・活躍が唯、年代順に連結されてゐるのではなく獨逸史否、更にはヨオロッパ世界史の高き展望の下に展開されてゐるのであり、西洋史に對する著者の深き造詣が到る處滲出して、此の點本書の價値を一層高からしめてゐるのである。

之を要するに本書こそは、かつは結び、かつは消え去るうたかたの如き世上に散見される御座なりの際物ではなく後々猶太人問題が論ぜられる場合、必ず引き合ひに出さるべき文化財として永くその生命を保持するであらう。敢へて江湖に推薦する次第である。(日本評論社發行、定價四圓五拾錢)〔豐田堯〕

Ernst Buschor, Griechische Vasen. 1940

ギリシアの壺がギリシア陶器の代表であり、またその勝れた形狀と壺繪とによつてギリシア美術史の內に重要なる地位を占めることは言ふ迄もない。それが美術品鑑賞品として蒐集され愛玩されたことは古來より今日に至る迄變らず、近代學者の努力の一つも亦作品の鑑定にそそがれてゐる。しかし鑑定といつても作者の決定――作者名のあるものは比較的少い――のみならず、時代と製作地方の決定であるが、それには形狀――全體の印象の外、胴張りや口や脚の比例――や畫題や畫法を先づ時代的に地方的に特色づけねばならない。この努力の第一歩として作品集や目錄の發刊があつたし、また現に進展しつつある。

しかしかかる努力は一方においては全體的なギリシア精神の展開によつて裏付けられねば、それは動搖し論議され得る印象的なるものに墮する危險がある。ここにギリシアの壺の研究はギリシア美術史のみならず、ギリシア精神史にかかはる。しかもこのためにはギリシアの美術品中最も多量に殘るものであるから、最も系統的な展開を辿り得るし、またギリシア人にとつても必して日用什器以上のものであつたがために、我々はこれ等を通じて時々のまた所々のギリシア人の努力の目標を捕へ得るのである。――勿論この外、壺は歷史事件、神話學、宗教學の資料となり得るが、この場合はそれに觸れずともよい。

ブショウの意圖は以上のところにあると私は思ふ。彼の著Plastik der Griechen, 1936. は彫刻によつて抽出されたギリシア精神の展開であるのに對し、本書はギリシアの壺によるそれであるといへよう。彼には既にGriechische Vasen Malerei, 1915. が

あつて、古典的な書となつてゐる。現代ドイツにおけるギリシアの壺に關するこのベスト・ケンナーの其後二十五年の精進が本書である。前著を「ギリシアの壺繪」と題し、本書を單に「ギリシアの壺」と名付けても、同一の立場、同一の意圖からなされたものである。しかし必して前著の改訂また補遺ではあるまい。本書の内に前著については一言も述べてゐないし、圖版には可成りの重複があつても、遙かにその數を加へてゐるのに反し、内容は頁數の增加にかかわらず少くなつてゐる。むしろ前著のより高度なより昇華されしものと思へるのである。

前著は石器青銅時代（エーゲ時代）、幾何學文樣、七世紀、黑繪、赤繪、フィディアス・ポリグノートス樣式と章を分つに對し、本書は目次も章もなく、ただ節があるのみである。しかし大體において前著の樣式區分を採つて、しかもより一層時代區別において、また地方區別において明確である。前著において稍々論理的に過重されて未だその遺物がそれに伴はぬきらひのあつた部分、例へば幾何學文樣七世紀におけるクレテやアルゴリス地方の意義の如きは、本書においてやゝ輕んじて、アッティカがその中心において美事なその發展過程を示されてゐる。彼においては實に一つの壺にも一定地方の一定時代の精神を解明し、且つそれをば全世界との關聯において見んとするのである。卽ち一つの壺にも時代の歷史を讀みとるのである。從つて彼は幾何學文樣にしてもアルカイク、クラッシク、バロックの發展を辿り、また本書は前著とは異つて大體において幾何學文樣より初めてゐる。もとよりエーゲ文明との關聯は無視し得ないとしても、飽く迄純正なギリシア精神に主眼を置く時、これは當然のことである。

しかしかやうな立場は明徹銳敏な直觀力と「物」に對する鑑識眼を伴はずば、甚しい獨斷と歪曲に陳るであらう。この點においては久しくアテネの獨逸考古學會長であり、今も大學が休となれば必ず匆々とサキスの發掘に赴き、常にはミュンヘン大學にギリシア考古學を講じてゐる彼に、安心してよいであらう。更に Furtwängler の Griechische Vasen の大業を繼ぎ、Corpus Vasorum Graecorum の獨逸部を擔當してゐる。

全文アート紙にて二七二頁の豪華本。戰時下のドイツ學界と學者がなほかやうな根源的領域に掘り進んでゐる一つの證。（十三マルク）〔村田數之亮〕

日本國土計畫論

石川榮耀著

今や世界歷史はその大轉換期に直面してゐる。この秋に當り我が國が東亞新秩序、否、世界新秩序の建設てふ未曾有の大業を遂行しつゝあること、茲に更めて申す迄もない。而もこの肇國以來の大業達成の爲めには、國防國家の建設といふことが切に要請せられてゐるわけである。

國防國家の建設は、今次の歐洲大戰以來正に世界的な動向となつてきた。而して國防國家の出現乃至その體制の强化には、國土計畫の完成が要望せられるのである。